

第17回 MASセミナー 港

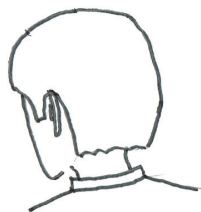
「癒され元気になる建築・
街とは何か？」

日時:2014/12/13(土)
講演:14:00~16:00



地表に近いものほど人の生態になじむ、という説を聞いたことがあります。建築素材で言えば土や木や水や空気・・・・・・・・。幾十万年、幾百万年の長い間、人類はそう言った地表の諸物と共に暮らしてきました。結果、私たちの体には長年のあいだにそういったものになじむ遺伝子情報が組み込まれて来たと考えるのが自然ではないでしょうか。建築素材に限らず、街並みの景観や色相についても同じように自然界にあるものを受け入れ易く感じます。照明であれば自然光に近い電磁波スペクトルをもつ白熱灯の方が蛍光灯より眼にやさしく演色性も優れていることを実感します。癒されるということは長年に亘り培われたそのような遺伝子情報に逆らわない、ということなのでは？ なんだか文明（科学）が文化（心・体）を駆逐してきているように思えます・・・・・・・・

鈴木 理己



「風景とひとの記憶」

生をうけたひとをはじめとする多くの生物やものまでもが爽やかに息づいているイメージがその場所にあつたらそれは快適な場所ということになるのでしょう。野良猫が古い寺院の回廊で幸せそうに午睡を楽しんでいる風景、それらを微笑ましく受け入れている子供や老人達、風景とひとの記憶が今という瞬間に継続している街にはこんなシーンが日常にあると思います。経済や文明の力を最優先に進め、現代という時代に流されていく街はぼくらの日常のなかでいくらかも観る事が出来ます。癒される街の記憶をもう一度かんがえてみませんか。



今井 均



「木、わたしのおともだち」

これはフランスのミヌー・ドルーエという少女が書いて、母国でベストセラーになったと書評で読んだ本のタイトルです。50年も前の話で、読んでもいないのにどういうわけか、書名もこの子の名前も忘れません。「こんな子供にさえ、樹木への愛があるんだ」と、こちらもガキだったのに感動したのは、そのころから樹木への関心があったからでしょう。日本人が自然と隣り合わせに生きるのをやめ、乱開発が当然と思われる時代に入っていたのです。景観としては、樹木は建物と等価値に見えます。端的に言えば、家の中の大きな窓から樹木が見え、家の周りに樹木があれば決まりです。ただし街としては、身の丈程度の植木では駄目ですよ。落ち葉が凄かるうが、大きな木ほどいいのです。でも、それが無理というなら、100年懸けましょう。それに、池でも滝でも、自然に近い水辺を加えましょう。本来の日本人に戻り、必ず癒されます。

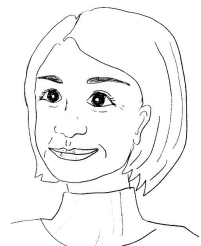


大倉富美雄



「人を癒す建築とは」

イギリスの「マギーズセンター」は、1993年造園家のマギー・ジェンクス夫人が自らのガン闘病のつらい経験から、病院の外に患者が安心して受け入れられる場所が必要だと考えました。1996年、夫のチャールズ・ジェンクス氏が彼女の遺志を継ぎセンターを実現しました。今では世界各地に広がり、東京でもプロジェクトが始まっています。患者さんがいつでも立ち寄って相談ができる場所、みんなの「家」のような建築ですが、建築家がボランティアで設計した、個性的で美しいデザインの建築が特徴です。人を癒す空間は、自然環境と一体になって、美しくデザインされていることはとても大切だと思います。人がその場所にいるとほっとできる、癒される空間のデザインを実現することは私の建築家としての夢です。



田口 知子



「そこに生活される方が関わった建築・街」

昔からある街を訪れるとなぜ癒されるのでしょうか？その住民が家、道、田畑を作り、育ててきたからだと思います。物を大切にする気持、愛着をもって接する中で生まれた建築・街であるからこそ、人の心に何らかの影響を与えていると思います。家づくり、街づくりについて、利用者が参加することにより、味のある「癒され、元気なる」ものができていると思っています。それを専門家として具体的な形にするのが建築家の役割だと考えています。



連健夫